

伝わる PowerPoint(パワポ)スライド作りのコツ

◎増田 健太¹⁾
京都大学医学部附属病院¹⁾

Microsoft PowerPoint (いわゆるパワポ) は、学会や研修会での発表 (プレゼン) に欠かせないソフトウェアですが、「私はデザインセンスがない」などのような苦手意識をもって PowerPoint スライドを作成される方も少なくないかもしれません。しかし、魅力的なパワポを作成するにあたっては、天才的なひらめきや芸術的なデザインセンスは必ずしも必要ではなく、ある程度のコツを守りさえすれば、聴く人の記憶に訴えかけるパワポスライドを作成することは難しい事ではありません。本講演では以下のような点を踏まえて、魅力的なパワポスライドを作成するためのコツについて解説します。

【その発表で何を最も伝えたいのか】

PowerPoint は、伝えたい内容の整理をするためのソフトではありません。パワポスライドを作成する際に、まず PowerPoint を起動してはいないでしょうか。内容の構想からスライド完成までの全工程のうち、実際に PowerPoint を操作するのは最後の 2~3 割程度です。PowerPoint を起動する前にまず入念に構想を練ることが大切です。

【色の使い方】

色の使い方を誤ると、どんなに内容が素晴らしくても、聴き手の脳が混乱して記憶に残らないプレゼンとなってしまいます。1 枚のパワポスライドに含める色はなるべく多くせず 3 色程度までとし、パワポスライド全体でもその 3 色で統一することが重要です。ベースカラー・メインカラー・アクセントカラーという概念を基準として、どのように色を決めるとよいかを解説します。

【文字について】

パワポスライドに使用する文字は、どのフォントを使用するのか、フォントのサイズをどれくらいにするのか、という 2 点を守ることによって、文を読みやすくすることができます。様々なフォントは大きく分けると「セリフ体」(明朝体など) と「サンセリフ体」(ゴシック体など) の 2 種類となり、遠くからでも可読性の高いのは「サンセリフ体」となります。

また、フォントサイズを調節することによって、1 枚のスライドに含まれる文字情報のうち、まず読んでほしい部分やより詳細な内容を表現する部分を区別して、聴き手の目の動きをコントロールすることも可能です。

そして最も重要なことは、フォントサイズは最低でも 18pt 以上とすることです。

【アニメーション効果について】

PowerPoint には「アニメーション」という機能があり、その種類は多岐にわたります。しかし、アニメーションを多用すると、その派手な動きに意識が向いてしまい、本当に伝えたいことが記憶に残らない、というようなことにもなりかねません。適切で程よいアニメーションの使用は聴き手にとって理解の助けともなりますので、その使い方を紹介します。

学会発表のテーマの見つけ方

◎吉岡 明治¹⁾公益財団法人 天理よろづ相談所病院¹⁾

臨床検査技師として経験を重ねる中で、日々の業務における「気づき」や「工夫」は着実に蓄積されていく。しかし、それらを学会発表という形へと昇華させるには、一定のハードルを感じる技師も少なくない。特に、発表未経験の若手技師（概ね経験年数 3～5 年程度）においては、「適切なテーマの選び方が分からない」「自身の経験に発表価値があるのか不安」といった悩みを抱えやすい傾向にある。加えて、自施設に指導者が不在の場合にはそうした壁がより高く感じられることもある。

本発表では、これらの悩みに対し、私見ながらもテーマ選定の具体的なヒントを共有することを目的とする。日常業務における些細な疑問、業務効率化を目指した工夫、臨床現場からの要望、後輩指導の中で得られる気づきなど、現場に根ざした実践の中にこそ、発表の題材となり得るテーマが潜んでいる。特別な研究や最先端技術に基づく内容でなくとも、日々の経験を自らの視点で捉え直すことにより、十分に意義のある発表につながる可能性がある。さらに、学会発表を通じて得られるオーディエンスならびに座長からの質問・フィードバックは、次の発表につながる新たなヒントが含まれており、さらなる視野の拡大につながる。また、技師会の研究会および各種学会の地方会は、他施設の技師・医師との情報交換の絶好の場であり、特に指導者不在の環境で働く技師にとっては、外部からの刺激や学びを得る機会となる。

本発表は Next Challenge!! のテーマにふさわしく、「まずはやってみる」という姿勢を応援する発表でありたい。若手技師が学会発表という新たな一步を踏み出すきっかけとなれば幸いである。

利益相反について知っておくべきこと

◎山崎 正晴¹⁾奈良県立医科大学附属病院¹⁾

学会発表において、タイトルスライドに続いて COI 関連事項を開示するスライドを掲げることが義務化されていることについて皆さんはどのように感じておられるのでしょうか？決まり事だからそれに従いはするけれど、何の意味があるのか、なぜそれが必要なのかについてピンとこない方もおられるでしょう。そんな「お作法」みたいなものは、ササっと見せて、早く本題に進みたい気持ちはわかりますが、このお作法には「なぜ、学会で発表するのか」という根本的な問いに深い関りがあります。発表は誰のためにするのかは、言わずもがな、聴衆のためです。聴衆は発表者に「何か自分の業務や研究に役立つことを教えてくれるかもしれない」と期待しています。昔の賢人たちは、発しようとしている言葉が、真実なのか、必要なのか、思いやりがこもっているのかという三つの門をくぐったとき、はじめて、その言葉を口にしたそうです。学会発表でも、この三つの門を意識して発表すると聴衆によく伝わります。しかし、最初の門、真実であるか否かを証明することは簡単ではありません。特に医学を含めた科学の世界において「私の言っていることは正しい」と認めてもらうのは容易ではありません。その領域の専門誌に論文を投稿すると、それが掲載に値するか否かを判断するために、その分野の専門家によって査読されます。査読者は心を鬼にして、批判的に、かつ、疑いの目をもってその論文の中身を検めます。それは論文が掲載されれば、その専門誌がお墨付きを与えたこととなり、それを読む人が「書かれていることは真実らしい」と捉えるからです。甘い査読は世に誤った、もしくは不十分な情報を広めることに加担するに等しいことなのです。厳しい目を向けられるのは論文に記載された検証方法や結果解釈だけではなく、その著者がその論文を発表することによって得られる「利益」にも向けられます。利益相反 (COI: Conflict of Interest) とは、主要な利益に関する専門的な判断や行動が、副次的な利益によって不当に影響されるリスクを生じさせる一連の状況を指します。このうち、一番わかりやすいのが経済的 COI です。たとえば、ある研究が企業・団体から資金提供を受けている場合、研究者が、その企業・団体に有利な結果を出すように研究を操作したり、不利な結果を隠蔽したりする可能性があります。実際にそれによって人命に関わる事案が発生しており、学会や専門誌が COI 管理に関する細かな規定を設ける際には、主に経済的 COI に焦点が当てられています。しかし、COI は経済的なもの以外にもあります。たとえば、研究者は自身の立場や経験、これまで注力してきたことなどを重視する傾向にあります。このこと自体がバイアスを生むことがあります。これを学術的 COI と言います。たとえば、特定の専門分野に深く関わっている研究者が、その分野に関するガイドライン策定や推奨において、個人的な立場や過去の経験に影響されて、客観的な判断を欠くことなどが挙げられます。また、研究者個人ではなく、研究者が所属する研究機関や学術団体が特定の企業・団体から経済的もしくは人的支援を受けている場合、その組織の意思決定権者が組織の利益を優先させてしまうと、そこで行われる研究の公平性や信頼性を損なう可能性があります。これを組織 COI と言います。このように COI を構成する要素は多種多様であり、研究者はそれを認識し、自らの研究にどのような影響を及ぼすのかについて注意する必要があります。ヒトは何かを世に発表する際に、必ず「褒められたい」「認められたい」と思います。また、それらを「ストレスなく、効率よくやりたい」と考えるのも当然です。一方で、学会口演であれ、論文であれ、一度、発表されたものは公の資産になります。聴衆や読者を意識的であれ、無意識的であれ、ミスリードしないように心する機会として、COI 管理の開示を生かしていくことをお勧めします。